

普通少女

辰屋千早

この本は
どこにでもいるけど
どこにもいない
そんな「彼女」への
ささやかな
誕生プレゼント

おはよう

また、昨夜も寝落ちしたらしい。顔の下敷きになっていたスマホのディスプレイは、書きかけのツイートが送る前の状態で、しかも誤入力・誤変換の嵐です。時間を見てびっくり。朝の限の授業がすでに始まっている時間でした。起こしてくれる人のいない一人暮らしとはいえ、最近の起床時間は少々乱れ気味。

「準備、準備」

取り敢えず顔を洗って着替え。手早く済ませます。そしてお化粧。ファンデーションを薄く伸ばし、チークは軽く薄紅を。目元は、とくに寝不足の隈を誤魔化しつつアイラインをはっきりと。口紅は薄桃色でちょっと光沢を付ける程度に。髪は軽くブラッシングしスタイリングスプレーで誤魔化せばどうにかかります。

朝ごはんなど食べている暇はありません。よく、古典的な少女漫画のテンプレート的にパンを口に加えて「遅刻、遅刻!」などと叫びながら道を走るヒロインがいるけど、あんなの伝説です。食べる暇がなければ、食べない。これが基本です。余分な脂肪がつくよりよっぽどマシだと思うんだけど。

大学生になって私服で学校に通えるのは、うれしいさ半分、めんどくささ半分。自分の趣味でクラシックロリータのファッションコーディネートで服を買ったはいいものの、大学に着ていけるものでもなし、出費の割には出番が少いのです。だから、普段は量販店頼みで、物量の組み合わせによる汎用性で誤魔化しちゃいます。今日も室内干ししてあった服から適当に選んじゃいます。タートルネックの白のニットに茶色のジャンパースカート、黒のストッキング。地味ないでたちだけど、とりあえず良いことにしておこ。今日は寒いからダウンコートを装着。

「こんなもんでしょ」

テキストとノート、筆記用具とカバンに入れて、そして忘れちゃいけないスマホ。私のお腹よりもスマホの充電がお腹いっぱいならいいのです。ブーツを履いて、鍵をかけて大学へいざ出発!

こう見えても女子大生だし、大学に行くのは当たり前なのだけど、今日の最初の講義はちょっと気が重い。あの教授とは多分相性が悪いのです。教授と相性が悪いと、講義の内容とも相性が悪くなって、単位とも相性が悪くなるという悪循環。そんな講義が一日の最初だと、どうも気分がのりません。心の中で

「ぱにやにやんだー」

と呟いては見るものの...

別に朝食を抜くくらいは何でもないんです。そんなの結構あることなので。でもつまらない講義のノートを一生懸命にとって疲れてしまうと、お昼の時間になっても、食欲がわかないのです。学食のガッツリした定食なんて夢のまた夢。おうどんで十分です。うどんと甘いものさえあれば生きて行けそうな気がする...。とりあえず義務感に駆られてお昼ごはんを食べたフラグを立てました。

「食べた、よね？」

午後の授業までは、まだ時間があります。スマホでリプをチェックしてお返事を書いたり、見れなかったツイートのチェック。すてきな眩きに出会うとそれだけでちょっと幸せになれたり、心がほっこりしたりして、心の充電になるのです。そうそう、スマホの電池は大丈夫かな？ 自分のお腹よりスマホの方を心配して...。変ですかね、私。

午後の最初は好きな講義。私にだって好きな講義の一つや二つあります。そりゃあ、あんまり多くはないかもですけど...。この講義の講師は、説明が分かりやすいのでちゃんといけるのです。午後一番の講義は睡魔に襲われやすいものですが、私は大丈夫でした。周りを見ると睡魔に襲われている人、結構いましたけどね。

午後の講義は2コマで今日はお終い。駅前のスーパーで買い物をしてお家に帰ります。

今日の夕飯はやっぱり食べなきゃダメかな、面倒くさいな。冷凍庫に冷凍うどんがまだあったはず。そんなこと考えながら自分の部屋のベッドの中で、ぬくぬく、ごろんごろんしてたんです。そしたら、ピンポンって。誰だろうと恐る恐る玄関先に出てみると、やっぱり「あいつ」でした。

「また来た」

「あいつ」は、「よ、入っていい?」と聞くので、コクンと頷くと、「はい、これお土産」とお菓子の入ったコンビニ袋を私に押し付けるや、勝手知ったるようにさっさと部屋の奥に入っていくの。さっきまで私が入っていたベッドに、人の許可もなく入ってる。一番あったかい場所をよく知ってる、勝手気ままな猫みたい。不思議な友達。

「ご飯、食べた?」

ああ、このパターン。よくあるの。「まだ」って答えると「じゃあ、作っていっしょに食べよう」そうって、あんたいっつも人に作らせて。でもね、この娘がくると、普段貧弱な食生活が改善されるのも事実。奴はごろごろ布団にくるまって、いつしかうたた寝を始める。その間、一人で腕をふるう私。なんか変だ。

「ほら、出来たよ。食べよ」

寝ぼけながら起きだしてくる。

でもね、やっぱり一人で食べるより、美味しいのです。どうしてだろう? ちょっと首をひねりながらも笑いあう食卓。懐かしくはない。むしろ新鮮なのです。そういえば楽しい家族の食卓ってあったかな?

食事が終わって、しばらくお茶を飲みながらお話。今日も泊まって行くつもりなのかと思ったら、珍しく泊まらずに、帰っちゃった。のこされた私には微妙に残された違和感。なんだろう、この感じ。

時々、自分でも嫌になるほど落ち込みます。

「ああ、正に自己嫌悪、自分が嫌になる」

家族のこと、大学のこと、そして自分のこと。憂鬱の地雷はそこかしこに埋まっているので、鬱モードには入りやすく、脱出には精神的な疲労を伴うのです。自分で消化し、昇華しようとしている鬱の素が溢れ出すと、つい、眩きを漏らしてしまうのです。そんなことしたら周りも巻き込んでしまうのに...

「私って、いやな子」

でも、そんな時ほど、見えない「繋がり」を感じてしまう。縋りたくなってしまう。泣きたくなってしまう。涙で画面が見えないよ。ズブズブと海に闇に沈んでいく感覚に襲われる。存在自体が憂鬱の元なら、いっそ消し去ってしまいたくらい。

負の連鎖、ネガティブスパイラルに永遠に落ちていく、足元の無い感覚。自らの生を呪いつつも消し去れない何か。自分は何を求めているのかすら分からない不確かさ。唯一確かなのは言葉を唾棄するように紡ぐ自分の存在だけ。その存在を確かめるように、唯一確実な自己の存在に縋るように辛うじて言葉を紡ぐ。その言葉が自己を傷つける痛みによって、自己存在を知るの。

カーテンの隙間から朝日がこぼれる。また寝落ちしちゃった。スマホがお腹空かせてる。充電してあげなきゃ。

「あっ、今何時？」

液晶の電波時計の目覚ましは、時刻と共に今日が休日であることを教えてくれました。カーテンを開けて、ウーンと伸びをします。お休みの日だから、自分にも余裕、眩きにも余裕。

ふと、目の周りにゆうべの涙のあとが残っていて、恥ずかしくなります。大急ぎで顔を洗って、皆におはようを眩くのです。今ここにいること、今という時に私がいること、そんな私を見守ってるたくさんの人へ、少しばかり感謝を込めて。

「今日はどうしようかな？」

私の休日が始まります。あなたならどうしますか？あとは、ご想像のままに...

普通少女

<http://p.booklog.jp/book/43244>

著者：辰屋 千早

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tatsuyachi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/43244>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/43244>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.